

旧薩摩藩麓の腕木門について

土田 充義・小山田善次郎・揚村 固

(受理 平成4年5月31日)

A Study on the Gate with the Roof Truss in the Old Satsuma-Han Area

Mitsuyoshi TSUCHIDA, Zenjiro KOYAMADA, and Katamu AGEMURA

We researched 62 gates with the roof truss in the old Satsuma-Han area : Izumi Fumoto, Chiran Fumoto, Iriki Fumoto, Shibushi Fumoto, Takaoka Fumoto, Kamou Fumoto, and Okuchi Fumoto for four years. The roof truss supported the eaves and was not used as an important gate in the historical architecture. But the columns were set in such a way to support the roof truss. Therefore, the roof truss was longer and were made the roof higher. Gates with the roof truss were important in old Satsuma-Han and were built in over six Fumotos, except Izumi-Fumoto. Gates with the roof truss were found in Izumi-Fumoto but without the columns necessary to support the roof. In other Fumoto such gates were also built but were much smaller than those in Chiran Fumoto.

Gates with the roof truss were developed with originality and creatively in each Fumoto for 200 years.

1. はじめに

旧薩摩藩には武士の集住地である麓が現存している。それらの麓を都市史的立場、都市景観を主要テーマにした立場それに武家住宅・門・蔵等の建造物を調査する立場の三方面から追求してきた。最初に出水麓を昭和63年に調査し、報告書にまとめた^{#1}。そこでは仮屋門（市指定文化財）と控柱付腕木門のすばらしさに接し、またその特徴を把握できた。平成元年度には薩摩郡樋脇町まちなみ保存計画に付随して、7棟の腕木門を調査し報告した^{#2}。平成2年8月に入来麓（薩摩郡入来町）と志布志麓（曾於郡志布志町）を調査し、その時に門を含め報告書にまとめた^{#3}。平成3年夏に科学研究費「一般研究C」により、高岡麓（宮崎県東諸県郡高岡町）・蒲生麓（始良郡蒲生町）・大口麓（大口市）の調査をした。その結果武家住宅については発表しているものの^{#4}門についてはまだ公表していない。蒲生麓には仮屋門が現存し、出水麓の仮屋門と同様に重要であった。まず両仮屋門を考察し、次に各麓の門の特徴を調べながら、控柱を付けない知覧麓の門について考察した。

門は出入口として大切な位置を占めていると同様にその家の象徴でもある。またその家柄が本家であるか分家であるかによっても形態を別にしてきた^{#5}。門は格式を示し、禄高に応じて板戸に打ち付けた饅頭金具が異なる^{#6}ともいわれる。1・2の例外を除くと腕木門で統一されており、類似の形態でありながら、軒を深くし、棟を高くすることで本家の門や禄高の多い門を表現した。それは屋根面積を広くすることで堂々とした門となり、また飾り金具で荘厳にすることができた。この二つのことが門の象徴を捉えるときに重要であろう。

2. 腕木門の特徴

門の種類はいくつもあり、その一つに腕木門がある。腕木門とは「門柱の頂上に棟木をかけ、両柱の前後に腕木をつらぬいて、これに出桁（でげた）をかけ、屋根を葺いた門である。」と記す（日本建築下巻 渋谷五郎・長尾勝馬共著）。だが、腕木門を「匠明」には記さず同じ形態のを冠木門（かぶきもん）と称す。「建築大辞典」に木戸門の一種と記す。不明確な所もあるが、柱を貫通した腕木で出桁を支えることから腕木門の名称が生まれ、それは門の種類のうち下位に属

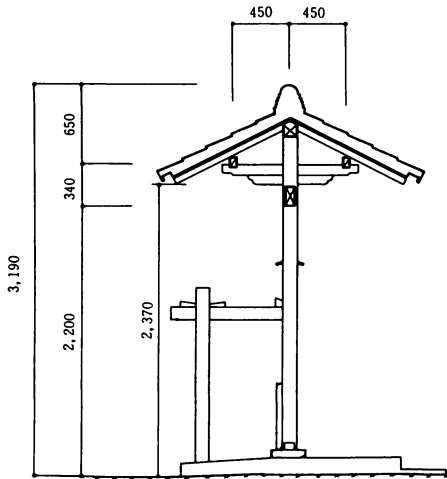


図-1 出水麓の㊿斑目家門断面図

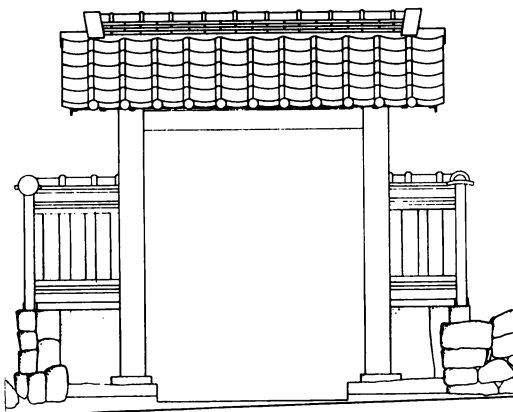


図-2 ㊿斑目家門立面図

すものであった(図-1・2参照)。

その腕木門が旧薩摩藩麓の武士の住宅に建てられている。調査した麓すべてに腕木門が建てられており、ただ1棟が例外として出水麓に現存し、それは柱が棟近くまで延びない薬医門であった(図-3・4参照)。

それでは多く建てられた腕木門の特徴を述べることにする。

①その第1は名称の通り、腕木を柱から出し、出桁を支えることである。その時に腕木は柱を貫通している。そのために腕木を太い材にできない制約から軒の出を深くできない。それ故下位の門とならざるをえない。ここで大切な特徴は腕木が柱を貫通しているということである。

②次は両柱を繋ぐ横架材(冠木)が両柱の後方を欠いてほぞ差しとせず嵌め込まれて、栓で留められて

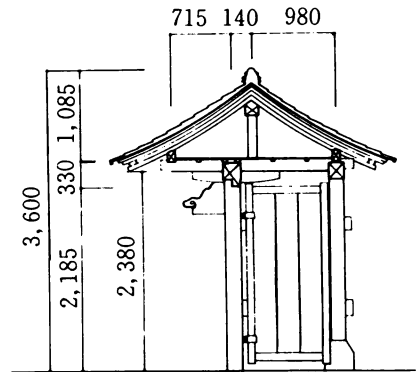


図-3 ㊿二宮(国)家門断面図

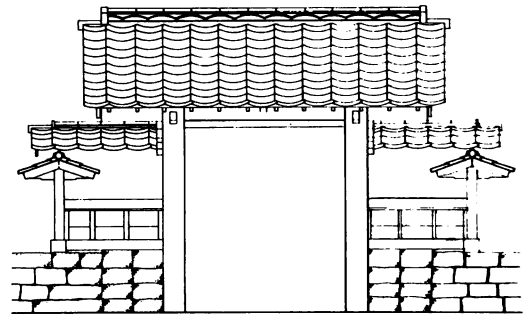


図-4 ㊿二宮(国)家門立面図

いることである。後から見ると横架材が柱を切っているが、正面からでは柱が上まで延びて、横架材が両柱にはほぞ差しで納められているかに見える。

③最後の特徴は柱が棟またはその近くまで延びていることである。

これら3つの特徴で実は柱が棟またはその近くまで延びている三番目の特徴が造形上重要であるにちがいない。何故ならこの麓の門でも工夫してうまく納めているからである。それ程までして何故柱を棟やその近くまで延ばすのかといえば柱上に渡した横架材(棟木の場合が多い)と両柱と冠木とで囲まれた欄間状の矩形の部分を確保することにあつた。その部分に家紋を入れたり、格子を嵌めたりしている。特に街路から何段かの石段を登って入る時には目につく。そのために天井を張った薬医門はただ1棟しか現存しないのかもしれない。

3. 控柱付腕木門の出現

旧薩摩藩麓の腕木門は柱が倒れるのを防ぐ控柱(図-1・2参照)というよりは腕木を支える控柱(図-6参照)の方が圧倒的に多い。腕木門と同時に支柱とし

ての控柱が立てられたと考えられるが、後になって入れたと推定しうる控柱がある。したがって、全部の腕木門の控柱が当初から出現したといえないが、当初から支柱として控柱が立てられたとする理由に二つある。

①その一つは出水麓で多く現存する控柱付腕木門で、柱位置と棟真とがずれているからである（図-8参照）。

②次は柱より前方と後方で腕木の長さが異なっているからである（図-25参照）。

腕木を支える控柱を立てるが故に柱真と棟真をずらせることができるし、腕木の長さを前方と後方で異にすることができる。

では何故控柱を立てるかといえば腕木を長くすることができるからである。つまり軒を深くすることができる。このことを明らかにするために、控柱を有しな

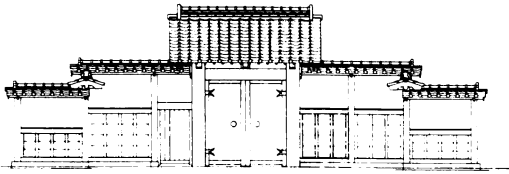


図-5 出水麓の①仮屋門立面図

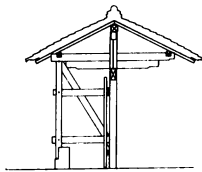


図-6 ①仮屋門断面図

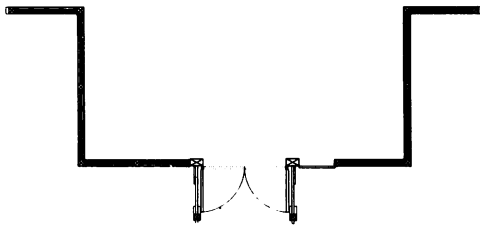


図-7 ①仮屋門平面図

い知覧麓の腕木門と比較してみたい。知覧麓の腕木門は棟真から出桁真までが平均602ミリで（表-1参照）、それに対し出水麓の方は当初から控柱を立て、その平均寸法が949ミリになる。引算すると控柱を立てている腕木門の方の軒が347ミリ（949-602=347）長い。それは当然のことであろう。支持する柱が後方に立つのでその分荷重を支えることができるからである。

4. 仮屋門の控柱

腕木の長さが柱を境にして前方と後方が異なり、控柱を立てる後方の腕木を長くしていれば当初から控柱を立てる計画があったといえるが、前方と後方の腕木の長さが同じであれば、必ずしも当初から控柱を立てる計画ではなく、後に腕木を支えるために立てたとも考えられる。麓の調査で仮屋門が2棟現存していた。1棟は蒲生麓の仮屋門（図-34・35・36）で柱真は棟真と一致している。その棟真から前方の出桁真まで1008ミリ、後方の出桁真まで1311ミリであるから、先に述べた通り、当初から控柱を入れる計画であっただろう。ところが出水麓の仮屋門（図-5・6・7）は柱真が棟真に一致し、その棟真から出桁真まで前後同じで1370ミリある。それでは当初から立てたか、後に補ったかそれだけからでは分からない。出水麓の仮屋門は第18代藩主島津家久公（1576～1638）が帖佐（始良町）から移築したと伝える。その時期は出水麓が完成する頃であり、江戸初期の門ということになる（昭和41年12月市指定文化財）。一方蒲生麓の仮屋門は文政9年（1826）に建てられた（棟札に記す）。その間は200年程の隔たりがある。私達が調べた範囲では控柱を立てない腕木門のうち、棟真から出桁真までの最大寸法は出水麓の佐多（美）家門の794ミリであり、控柱を立てる門でも1130ミリ（志布志麓の天水家門）で、1370ミリより少ない。その出桁の出の長さは異常である。仮屋門であるから柱間真々を広く（2511ミリ）、棟を高くすると同時に軒を深くすることが大切であったにちがいない。そこで両仮屋門の寸法値を比較してみたい。

| 名称 | 柱真々 | 柱真と控柱真 | 棟高 | 出桁高 | 棟真と出桁真 | 年代 |
|---------|------|--------|------|--------------------|--------------------|-------|
| 出水麓の仮屋門 | 2511 | 1396 | 4029 | 2960 | 1370 | 17世紀初 |
| 蒲生麓の仮屋門 | 2594 | 1359 | 4475 | 2895（前） 2875（後） | 1008（前） 1311（後） | 1826年 |
| 差（上-下） | -83 | +38 | -446 | +65（前） +85（後） | +362（前） +59（後） | 約200 |

両仮屋門の寸法で差が大きいのは棟高と、柱真と出桁真の間である。このことは蒲生麓の仮屋門の方が屋根勾配を急にしていることを示す。後世になると技術の発達で屋根勾配が急になることは一般的傾向として捉えられる。次に蒲生麓の仮屋門の後方の棟真と出桁真との間よりも出水麓の仮屋門の方が6センチ程長い。このことから控柱が創建当初から計画されていたと推定する。同じ出水麓にある阿多家門や二階堂家門は

同形式で、他の門と軒の出の長さを比較する時にやはり控柱が当初から立ててあったと考えた方が説明しやすい。腕木門といえば門の種類では下位に属していたものの控柱を立てることで、堂々とした形態の門まで高めることができた。そのため控柱付腕木門が重要であったことを理解する。したがって旧薩摩藩麓の門は控柱付腕木門が正式であったといえる。

5. 各麓の腕木門

①出水麓の腕木門

腕木門24棟と薬医門1棟、計25棟の門について分類

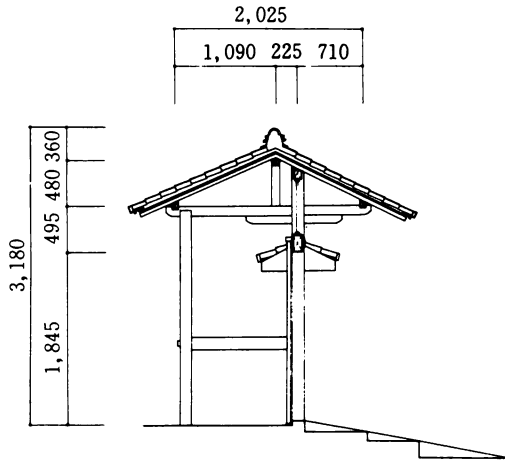


図-8 出水麓②徳留家門断面図

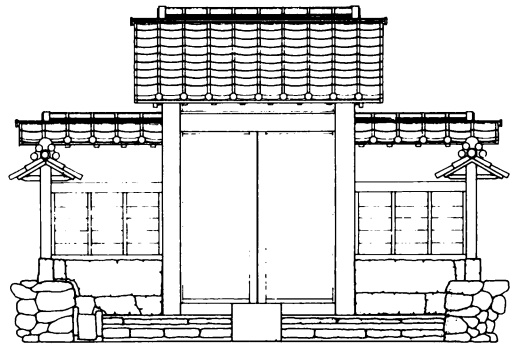


図-9 ②徳留家門立面図

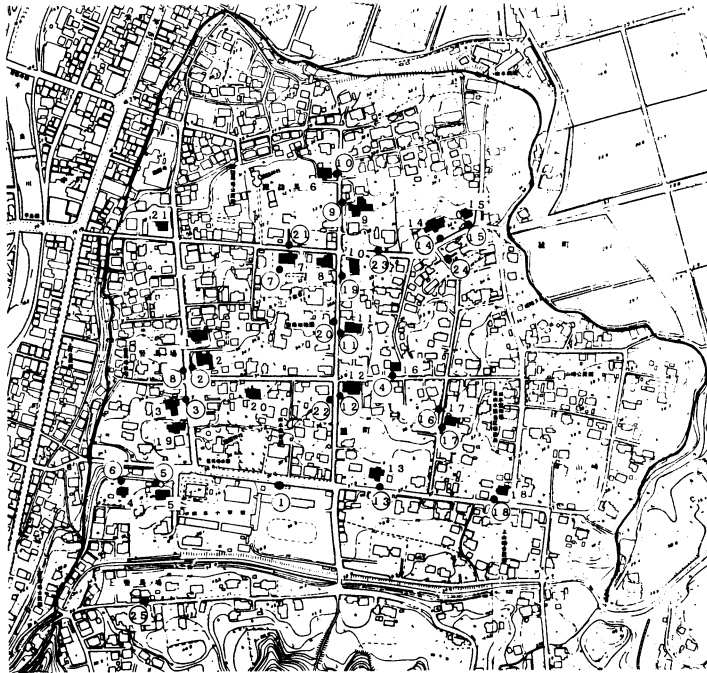


図-40 出水麓の腕木門位置図 (番号は表-1のと同じ)

をし、考察した^{註7}。その後平成3年2月19日に門の修理中に黒書銘が発見され、徳留家門(図-8・9)が宝暦13年(1763)に建てられたことが分かった^{註8}。その結果、棟真と柱真をずらせる方法がすでに江戸後

期(宝暦-文政)に現存していたことが分かり、新しい工法でないことが判明した。仮屋門については先に述べた通り、江戸初期に建てられており、棟真と柱真が一致していた。それが江戸時代中期頃には柱が棟よ

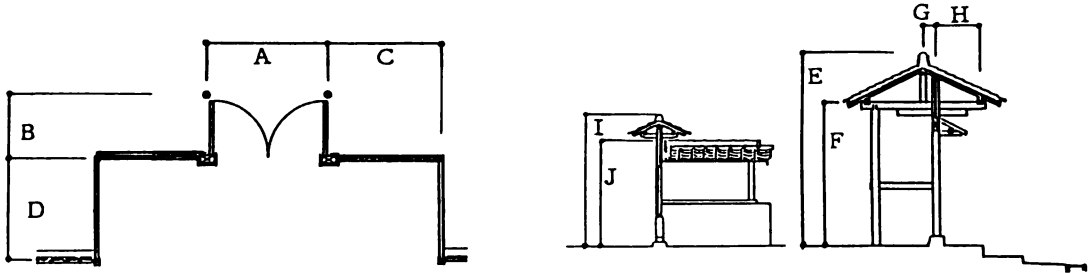


図-41 寸法値表記号

表-2 出水麓腕木門寸法表

| 名 称 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | 年代 |
|---------|------|--------|------------|--------------|------|------|-----|--------------|------|--------|-----------------|
| ① 仮屋門 | 2511 | 1395.5 | 3022 | 4029 | 4175 | 2960 | 0 | 1370 1415 | 2700 | 2410 | 17世紀初 |
| ② 志賀家門 | 1985 | 610 | 1370 | ブロック | 3055 | 2315 | 125 | 560 | 2395 | ナシ | |
| ③ 税所家門 | 1905 | 1010 | 1430 | ／＼ | 3440 | 2450 | 155 | 700 | 2320 | ナシ | 18世紀中 |
| ④ 二宮家門 | 2170 | 1260 | 1345 | 1055 | 3600 | 2515 | 140 | 715 | 2175 | 1925 | 19世紀初 |
| ⑤ 武宮家門 | 2050 | 1020 | 1510 | 斜 2200 | 3270 | 2430 | 210 | 560 | 2490 | (1970) | |
| ⑥ 二宮家門 | 1730 | 1060 | ブロック | ／＼ | 3250 | 1690 | 335 | 645 | ／＼ | ／＼ | |
| ⑦ 河添家門 | 1860 | 510 | 1450 | 1520 | 3090 | 2230 | 0 | 570 | 2045 | ／＼ | 明治後期 |
| ⑧ 松本家門 | 1905 | 590 | 1690 | ／＼ | 3060 | 2290 | 0 | 555 | 2405 | ／＼ | |
| ⑨ 伊藤家門 | 2040 | 1100 | 1850 | 1740 | 3640 | 2710 | 120 | 820 | 2495 | (2000) | |
| ⑩ 野村家門 | 1920 | 1017.5 | 1520 | 1720 | 3405 | 2565 | 170 | 770 | 2270 | 2060 | |
| ⑪ 川内家門 | 2105 | 1140 | 1395 | 1700 | 3450 | 2425 | 220 | 825 | 2150 | (1930) | |
| ⑫ 阿多家門 | 2150 | 1070 | 2110 | 2120 | 3580 | 2410 | 0 | 1040 | 2400 | (1980) | |
| ⑬ 二階堂家門 | 2050 | 1040 | 1280 | 1240 | 3740 | 2785 | 0 | 1040 | 2360 | 2560 | |
| ⑭ 宮路家門 | 2130 | 1230 | 1695 | 3560 | 3610 | 2570 | 285 | 630 | 2460 | 1870 | |
| ⑮ 伊牟田家門 | 2105 | 1090 | 1845 | ナシ | 3300 | 2515 | 205 | 720 | 2260 | ナシ | 18世紀後半 |
| ⑯ 二宮家門 | 2040 | 1090 | 1275 | 1370 | 3365 | 2345 | 200 | 780 | 2325 | (2035) | |
| ⑰ 山口家門 | 2080 | 1060 | 1300 | ブロック 1400 | 3500 | 2600 | 45 | 775 | 2455 | ／＼ | |
| ⑱ 壺岐家門 | 2010 | 1100 | 1390 | 石 (2000) | 3490 | 2490 | 235 | 700 | 2355 | (1700) | |
| ⑲ 川俣家門 | 1925 | 542 | 1385 | 1800 | 3110 | 2325 | 130 | 610 | 2275 | 1985 | |
| ⑳ 徳留家門 | 1825 | 1005 | 1925 | 1290 | 3180 | 2300 | 225 | 710 | 2140 | 1805 | 宝暦13年 (1763) |
| ㉑ 石塚家門 | 1970 | 960 | 1360 | 1545 | 3665 | 2245 | 210 | 820 | 2465 | (2255) | |
| ㉒ 瀬戸山家門 | 1970 | 1110 | 1670 | 2220 | 3340 | 2340 | 150 | 810 | 2210 | 1755 | |
| ㉓ 宗像家門 | 1990 | 715 | 1285 | 1420 | 2990 | 2250 | 120 | 570 | 2030 | 1560 | |
| ㉔ 郡山家門 | 2040 | 1050 | 1630 | 1400 | 3390 | 2340 | 195 | 750 | ／＼ | ／＼ | |
| ㉕ 斑目家門 | 1960 | 710 | 630 830 | 940 | 3190 | 2640 | 0 | 450 | 1660 | 1660 | |

り前方に出てずれることになった。江戸中期頃というのは徳留家門より更に年代が古い門の存在を認めうるからである。この形式の門は他の麓では少ない。入来麓の入来院（マ）家門（図-16参照）しかその存在を認めえない。したがって出水麓の門の特徴といえるが、腕木門24棟のうち約2割にあたる6棟がずれておらず、柱真と棟真とが一致していた（表-2参照）。また控柱が当初から計画されていた門は18棟であったから、当初から控柱付腕木門が多かったことも認めうる。

②知覧麓の腕木門

腕木門16棟全部控柱を立てていない。それは大きな特徴であるが、江戸期の門をまだ確していないので、何時から建てられたか分からない。この知覧麓ではもう一つの特徴として、本家の門は両側に小屋根を設けるが、分家は設けない。これを造形上明らかにしえた²⁹。簡潔に言えば本家の門は小屋根を設けることで、門の屋根の軒を深くし、棟を高くできたことを寸法値から説明した。つまり分家の門と比較討論するこ

とによって明らかにしえた。

次に脇柱が他の麓の脇柱より太く、この脇柱を石垣に挟むことで、門を固定させている。そのために脇柱が太いことを指摘した²⁹（表-7・8・9参照）。

調査した16棟のうち5棟は新築し修景した門である。

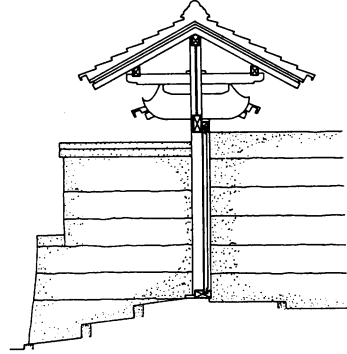


図-11 ④佐多（直）家門断面図

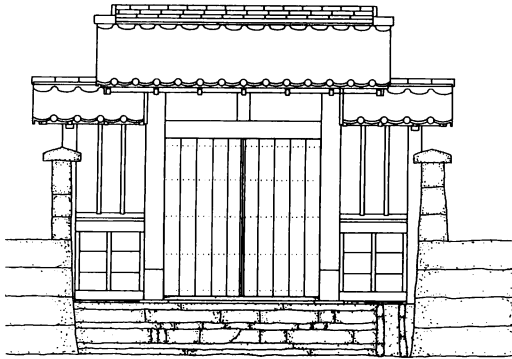


図-10 知覧麓の④佐多（直）家門立面図

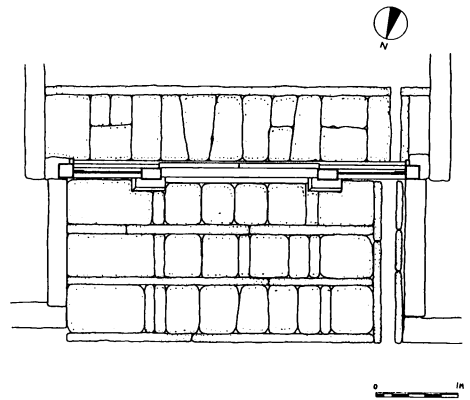
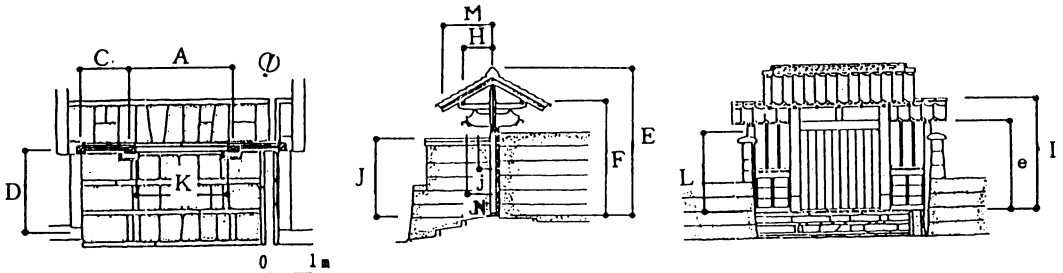


図-12 ④佐多（直）家門平面図



- A：親柱間真真寸法
- C：親柱・脇柱間真真寸法（扉寸法・形式）
- D：脇柱・袖壁間真真寸法
- E：大屋根棟高（F；出桁高）
- I：小屋根棟高（e；出桁高）

- J：袖壁高
- K：親柱間内法寸法
- L：冠木高内法寸法
- M：大屋根の軒の出（H；親柱・出桁間真真寸法）
- N：小屋根の軒の出（j；親柱・出桁間真真寸法）

図-42 知覧麓の寸法値表記符号

表-3 知覧麓の腕木門寸法一覧表

単位 (m)

| 名 称 | A | C | D | E | I | J | K | L | M | N | 年代 |
|-----------------------|------|-----------------|------------------|----------------|----------------|--------------------|------|------|---------------|--------------|-----------------|
| ① 森 家 門 | 1940 | 965 扉900(引) | 縦板瓦葺 | 3420 (2688) | 2780 (2253) | 縦板瓦葺 約2.2m | 1700 | 1990 | 1250 (720) | 570 (315) | S.57 修景 |
| ② 高城(夕)家門 | 1950 | 770 扉920(引) | 縦板瓦葺 1590 | 3240 (2575) | | 縦板瓦葺 1830 | 1740 | 1970 | 890 (540) | | S.59 修理 |
| ③ 高城(耕)家門 | 2150 | 870 扉1020(引) | 石垣+生垣 約2.3m | 3240 (2575) | | 石垣+生垣 約2.3m | 1940 | 1970 | 870 (540) | | S.62 修景 |
| ④ 佐多(直)家門 | 2115 | 1031 扉960(引) | 石垣 約1.6m | 3640 (2685) | 2770 (2223) | 石垣 約1.9m | 1875 | 1990 | 1230 (708) | 555 (285) | 18世紀末 S.60修理 |
| ⑤ 佐多(明)家門 | 1950 | 770 扉920(引) | 石垣+生垣 約1.8m | 3285 (2583) | | 石垣 約1.3m | 1740 | 1975 | 840 (535) | | S.58 修景 |
| ⑥ 佐多(民)家門 | 1934 | 880 扉905(引) | 石垣 約1.8m | 3148 (2397) | | 石垣 約1.9m | 1724 | 1796 | 873 (539) | | |
| ⑦ 佐多(美)家門 | 1960 | 755 扉880(引) | 石垣 約2.1m | 3647 (2797) | 3102 (2360) | 石垣 約1.8m | 1711 | 1995 | 1184 (794) | 654 (454) | S.61 修理 |
| ⑧ 佐多(良)家門 | 1875 | 835 (扉なし) | 石垣 約2.4m | 3010 (2305) | | 石垣 左約1.8m右約1.2m | 1670 | 1755 | 874 (580) | | S.57 修理 |
| ⑨ 平山(亮)家門 | 1895 | 698 扉860(引) | 縦板瓦葺 1972 | 3095 (2417) | | 縦板瓦葺 1857 | 1655 | 1900 | 1064 (540) | | S.60 修理 |
| ⑩ 三 宅 家 門 | 2040 | 815 扉965(引) | 縦板瓦葺 2260 | 3230 (2575) | | 縦板瓦葺 1800 | 1830 | 1970 | 865 (540) | | S.59 修理 |
| ⑪ 平山(ソ)家門 | 1940 | 860 扉900(引) | 石垣+生垣 | 3440 (2688) | 2800 (2223) | 石垣+生垣 約2.7m | 1700 | 1990 | 1265 (720) | 570 (320) | S.57 修景 |
| ⑫ 木 原 家 門 | 1935 | 965 扉900(引) | 石垣+生垣 約2.4m | 3430 (2675) | 2745 (2212) | 石垣 約1.4m | 1705 | 1980 | 1278 (718) | 578 (313) | S.58 修景 |
| ⑬ 石 神 家 門 | 1925 | 766 扉893(引) | 石垣+生垣 約1.7m | 3296 (2626) | 2789 (2265) | 石垣 約1.6m | 1688 | 1956 | 988 (588) | 668 (308) | S.63 修理 |
| ⑭ 樋 渡 家 門 | 1825 | 745 扉743(引) | 石垣+ブロック 約1.5m | 3094 (2467) | | 石垣+ブロック 約1.6m | 1600 | 1925 | 888 (538) | | |
| ⑮ 赤 崎 (友) 家 門 | 1883 | 748 扉860(開) | 石垣+ブロック 約1.5m | 3092 (2459) | | 石垣+ブロック 約1.3m | 1681 | 1915 | 838 (540) | | |
| ⑯ 平山(敏)家門 | 1900 | 793 1790(引) | 石垣 | 3046 (2413) | | 石垣 約1.6m | 1690 | 1885 | 850 (499) | | |
| ⑰ 赤 崎 (寿) 家 門 ※石柱門 | 2745 | | 玉石積み石垣 | | | 玉石積み石垣 | 2400 | | | | |

表-7 知覧麓の柱寸法表

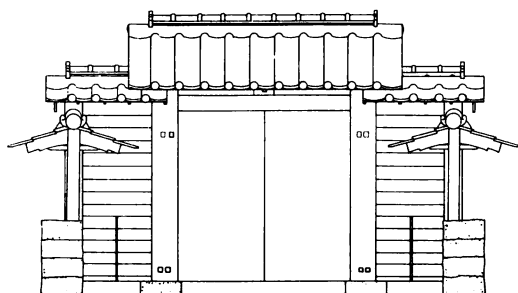
| 番号 | 名 称 | 親柱(横×縦) | 脇柱(横×縦) | 番号 | 名 称 | 親柱(横×縦) | 脇柱(横×縦) |
|----|----------|---------|---------|----|-----------|---------|---------|
| ① | 森(節子)家門 | 240×140 | 180×180 | ⑩ | 三宅(良介)家門 | 210×120 | 210×120 |
| ② | 高城(タミ)家門 | 210×120 | 210×120 | ⑪ | 平山(ソヨ)家門 | 240×140 | 180×180 |
| ③ | 高城(耕夫)家門 | 210×120 | 210×120 | ⑫ | 木原(ヒル子)家門 | 230×135 | 180×180 |
| ④ | 佐多(直忠)家門 | 240×140 | 180×175 | ⑬ | 石神(みつ)家門 | 237×135 | 210×149 |
| ⑤ | 佐多(明美)家門 | 210×120 | 210×120 | ⑭ | 樋渡(ソエ)家門 | 225×125 | 165×130 |
| ⑥ | 佐多(民子)家門 | 210×115 | 215×115 | ⑮ | 赤崎(友安)家門 | 202×126 | 190×131 |
| ⑦ | 佐多(美舟)家門 | 249×137 | 178×134 | ⑯ | 平山(敏子)家門 | 210×120 | 195×120 |
| ⑧ | 佐多(良治)家門 | 205×128 | 158×128 | ⑰ | 赤崎(寿逸)家門 | 345×275 | ※石柱門 |
| ⑨ | 平山(亮一)家門 | 240×128 | 200×134 | | | | |

表－8 入来麓の柱寸法表

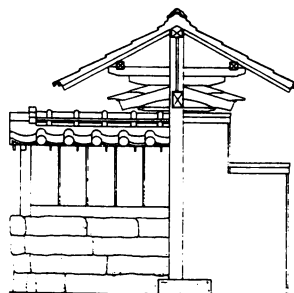
| 番号 | 名 称 | 親柱(横×縦) | 脇柱(横×縦) | 番号 | 名 称 | 親柱(横×縦) | 脇柱(横×縦) |
|----|---------|---------|---------|----|---------|---------|---------|
| ① | 田 中 家 門 | 255×133 | 180×121 | ④ | 東 郷 家 門 | 285×152 | 180×145 |
| ② | 福 崎 家 門 | 254×129 | 165×129 | ⑤ | 川 添 家 門 | 280×135 | 210×135 |
| ③ | 入 来 家 門 | 285×125 | 104×103 | | | | |

表－9 志布志麓の柱寸法表

| 番号 | 名 称 | 親柱(横×縦) | 脇柱(横×縦) | 控柱(横×縦) |
|----|-----------|---------|---------|---------|
| ① | 貴 島 家 門 | 250×130 | 90×90 | 130×125 |
| ② | 阿 多 家 門 | 150×120 | 110×90 | 135×135 |
| ③ | 榎 屋 家 門 | 280×130 | 90×90 | 140×140 |
| ④ | 福 山 家 門 | 290×140 | 95×95 | 140×140 |
| ⑤ | 樋 渡 家 門 | 205×110 | 60×60 | 100×100 |
| ⑥ | 田 原 家 門 | 250×130 | 85×85 | 125×125 |
| ⑦ | 木 下 家 門 | 285×120 | 90×90 | 125×125 |
| ⑧ | 海 老 原 家 門 | 240×130 | 45×85 | 120×120 |
| ⑨ | 鹿 島 家 門 | 290×140 | 100×100 | 155×65 |
| ⑩ | 重 信 家 門 | 230×115 | 100×115 | 115×115 |
| ⑪ | 天 水 家 門 | 260×130 | — | 140×140 |
| ⑫ | 川 野 家 門 | 295×112 | 58×89 | 135×132 |



図－13 入来麓の①田中家門立面図

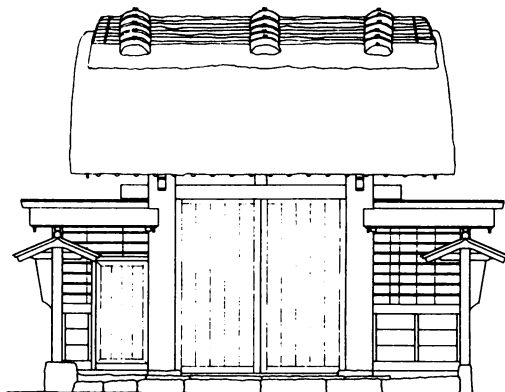


図－14 ①田中家門立面図

それらを含めて16棟の門の棟高を他の麓の控柱付腕木門と比較すると平均値で約20センチ程低い。それに棟真と出桁真との間が平均値で約35センチ浅い。したがって控柱付腕木門にすることで本家の門より更に軒を深く、棟を高くしえたといえる。

③入来麓の腕木門

腕木門5棟のうち、控柱付腕木門は1棟のみで、3棟は控柱を立てず、残り1棟は後に控柱を立てて補った。それらの寸法（棟真と出桁真の間、棟高）を並べると明らかに控柱付腕木門が大きな数値を示している（表－1参照）。また控柱を立てていない腕木門3棟は近似値を示している。建立年代を明らかにしないために実際は不明であるが、江戸期の門で控柱を立てない腕木門はなかったように思われる。



図－15 入来麓③入来院（マ）家門立面図

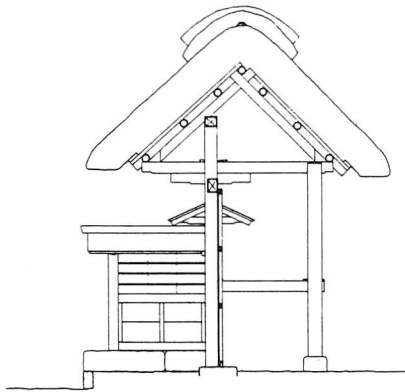


図-16 ③入来院 (マ) 家門断面図

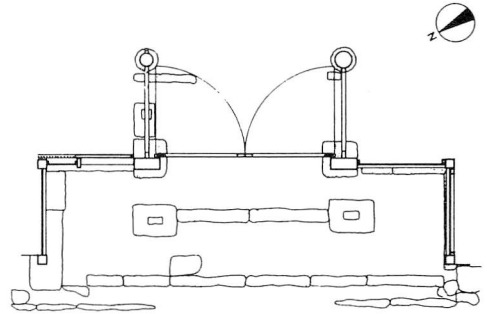


図-17 入来院 (マ) 家門平面図

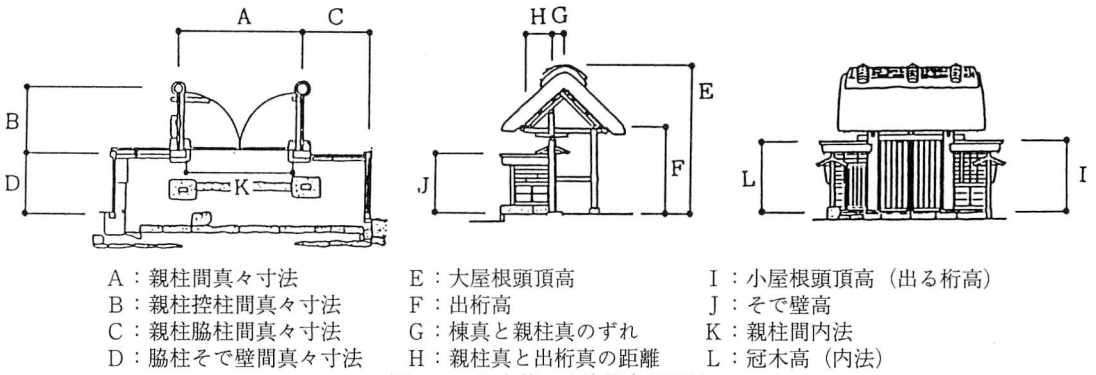


図-43 入来院の寸法値表記号

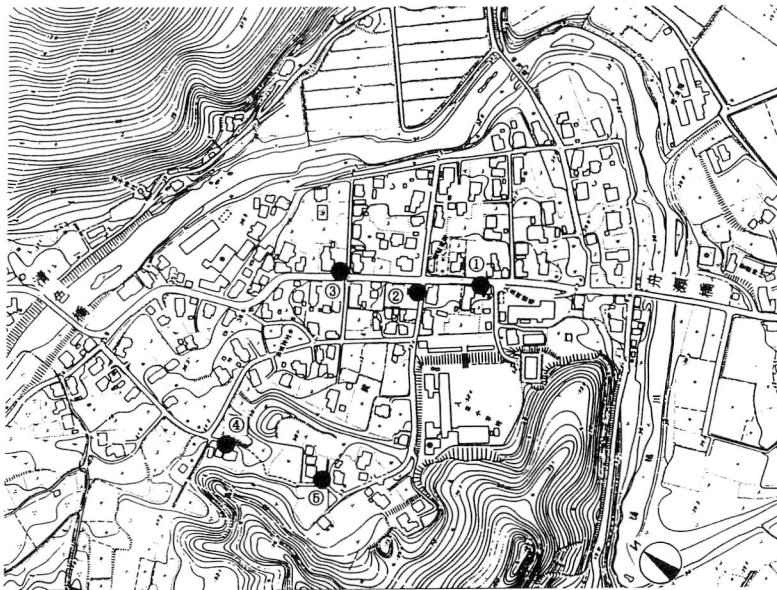


図-44 入来院の腕木門の分布図

表-4 入来麓の腕木門寸法表

| 名称 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | 年代 |
|---------|------|------|-----------------|-----------|------|------|-----|-------------------|----------------|-------------|------|------|------|
| ① 田中家門 | 2075 | 1174 | 948 | 1543 | 3015 | 2430 | 0 | 580 | 2462 (2000) | 1954 | 1820 | 1938 | 明治初 |
| ② 福崎家門 | 2070 | 550 | 820 扉922(引) | 石垣 約2m | 3050 | 2326 | 0 | 517 | なし | 石垣 約1.6m | 1816 | 1750 | |
| ③ 入来院家門 | 2060 | 1093 | 1100 扉900(開) | 1012 | 3845 | 2250 | 211 | 672(前) 1093(後) | 1940 (1636) | 1606 | 1775 | 1870 | 19世紀 |
| ④ 東郷家門 | 2120 | 514 | 860 | 1278 | 3310 | 2520 | 0 | 627 | 2500 (2000) | 1740 | 1835 | 2140 | |
| ⑤ 川添家門 | 2070 | 448 | 815 | 1230 | 2954 | 2508 | 0 | 530 | なし | 1723 | 1790 | 1900 | |

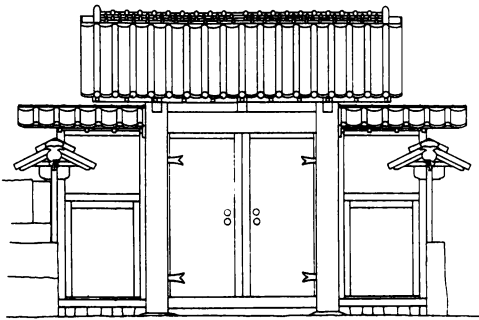


図-18 志布志麓④福山家門立面図

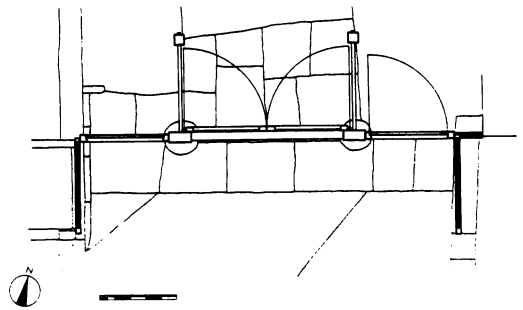


図-20 ④福山家門平面図

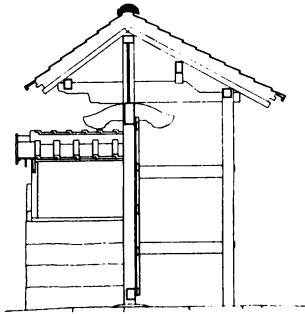


図-19 ④福山家門断面図

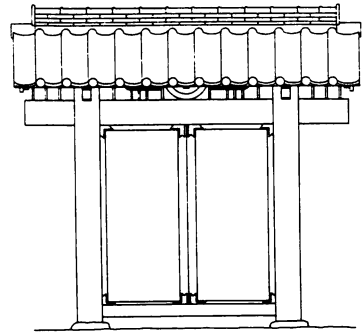


図-21 志布志麓の⑪天水家門立面図

④志布志麓の腕木門

腕木門12棟はいずれも控柱を立てて、1棟を除いて他は門の両側に小屋根を設けている。共通している点は腕木の長さが棟を境にして前方と後方で異なり、後方の方が40センチ程長いことである(表-5参照)。そのために前方の出桁の位置より、後方の出桁の位置を下げて屋根の納まりをよくしている。

前方の出桁は腕木上にかかるが、後方の出桁は腕木を支える肘木を後方へ延ばしてその上にかかる。腕木と肘木を同じ材で作る、上手な納め方である。12棟のうち9棟はこの方法を用いているが、2棟は後方も前方と同

様に腕木の上にかせて、屋根勾配を前方と後方で変えて処理している。その1棟川野家門(図-25)は前方と後方の腕木長さが他の門の約半分の20センチ程である。そのために比較的容易に納めえた。他の1棟重信家門は勾配を変えて処理している。残りの1棟は控柱に出桁をのせている。門の姿形の美しさからいえば後方の出桁を下げずに、勾配を変えることで処理する方がよい。その方が棟を高くして勾配をそれ程緩くしないですむからである。

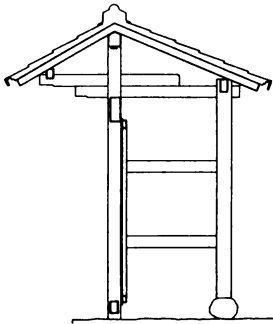


図-22 ⑪天水家門断面図

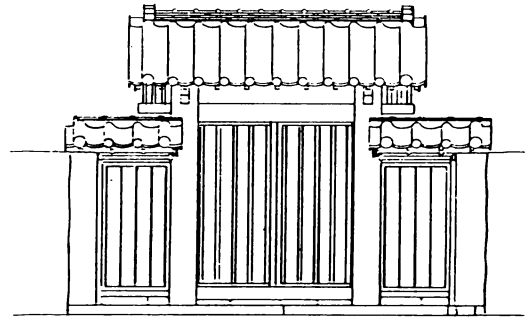


図-24 志布志麓の⑫川野家門立面図

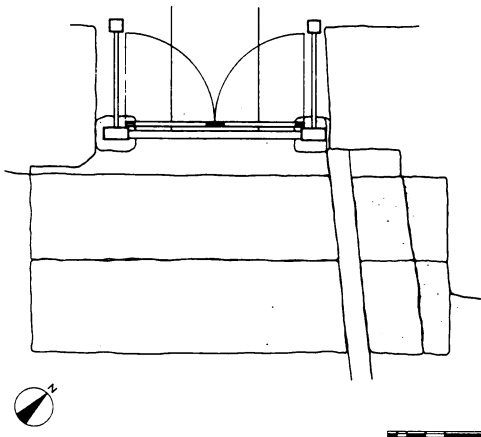


図-23 ⑪天水家門平面図

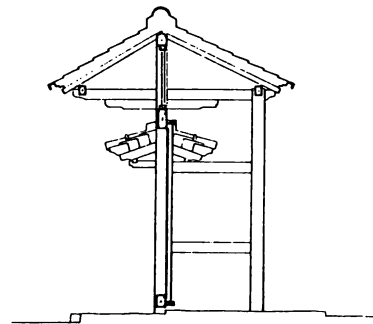
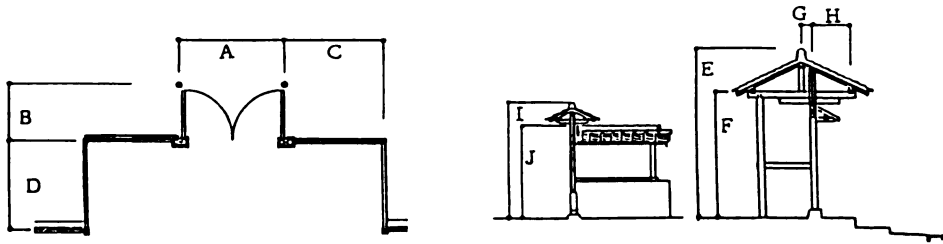


図-25 ⑫川野家門断面図



- | | | |
|----------------|---------------------|--------------|
| A : 親柱間真々寸法 | E : 大屋根棟高 | I : 小屋根頭頂高 |
| B : 親柱控柱間真々寸法 | F : 出桁高 | J : そで壁高 |
| C : 親柱脇柱間真々寸法 | G : 棟真と親柱真のずれ | K : 親柱間内法 |
| D : 親柱そで壁間真々寸法 | H : 親柱真と出桁真の距離 (棟真) | L : 冠木高 (内法) |

図-45 志布志麓の寸法値表記記号

表-5 志布志麓の腕木門寸法表

| 名称 | A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | 年代 |
|---------|------|------|------------------|-------------|------|--------------------|---|-----------------------------|----------------|-------------|------|------|------|
| ① 貴島家門 | 1955 | 1065 | 900 扉880(開) | 石垣 約2.0m | 3155 | 2440(前) 2370(後) | 0 | 635(前) 1065(後) | 1916 (1549) | 石垣 約1.4m | 1705 | 1890 | |
| ② 阿多家門 | 1950 | 1090 | 888 扉865(開) | 石垣 約1.4m | 3014 | 2360(前) 2220(後) | 0 | 700(前) 1078(後) | 2056 (1606) | 石垣 約1.8m | 1800 | 1875 | |
| ③ 榎屋家門 | 2030 | 1075 | 699 扉875(開) | 石垣 | 3263 | 2492(前) 2425(後) | 0 | 694(前) 1074(後) | 2460 (2000) | 石垣 | 1750 | 2021 | |
| ④ 福山家門 | 2235 | 1275 | 1248 扉1030(開) | 1200 | 3875 | 2910(前) 2790(後) | 0 | 774(前) 653(中) 1270(後) | 2640 (2290) | 2210 | 1945 | 2350 | |
| ⑤ 樋渡家門 | 2105 | 1045 | 498 扉1000(開) | 石垣 約1.8m | 2970 | 2315(前) 2223(後) | 0 | 613(前) 1070(後) | 1760 (1543) | 石垣 約1.6m | 1900 | 1935 | |
| ⑥ 田原家門 | 1960 | 1058 | 728 扉880(開) | 石垣 約2.2m | 3014 | 2300(前) 2158(後) | 0 | 688(前) 1048(後) | 1943 (1543) | 石垣 | 1710 | 1865 | |
| ⑦ 木下家門 | 2065 | 1120 | 1033 扉925(開) | 石垣 | 3352 | 2515(前) 2400(後) | 0 | 730(前) 1120(後) | 2520 (1920) | 石垣 | 1780 | 1970 | |
| ⑧ 海老原家門 | 1910 | 1070 | 723 扉875(開) | 石垣 約1.3m | 3100 | 2375(前) 2250(後) | 0 | 700(前) 1060(後) | 2200 (1886) | 石垣 | 1670 | 1960 | |
| ⑨ 鹿島家門 | 2060 | 1063 | 1110 扉860(開) | 石垣 約3.4m | 3014 | 2363(前) 2245(後) | 0 | 635(前) 1063(後) | 1900 (1514) | 石垣 約0.9m | 1770 | 1820 | |
| ⑩ 重信家門 | 1940 | 1085 | 835 扉885(開) | 石垣 約2.0m | 3340 | 2520(前) 2500(後) | 0 | 670(前) 1090(後) | 1900 (1600) | 石垣 約1.7m | 1710 | 1980 | |
| ⑪ 天水家門 | 2060 | 1132 | 扉930(開) | | 3250 | 2565(前) 2454(後) | 0 | 706(前) 1130(後) | | | 1800 | 2068 | 19世紀 |
| ⑫ 川野家門 | 1993 | 1044 | 928 扉895(開) | 石垣 約2.3m | 3485 | 2550 | 0 | 860(前) 1056(後) | 2107 (1679) | 石垣 約1.8m | 1698 | 2100 | |

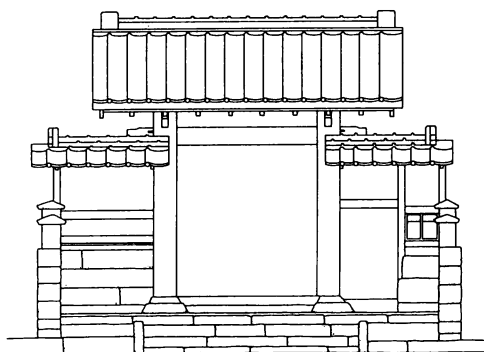


図-26 高岡麓の①旧河上家門立面図

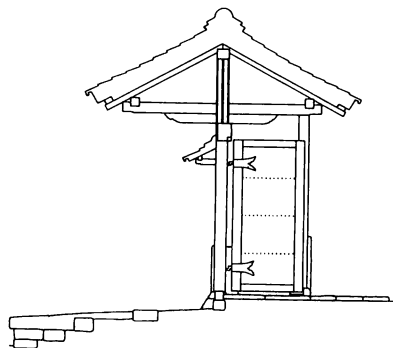


図-27 ①旧河上家門断面図

⑤高岡麓の腕木門

腕木門3棟のうち2棟は控柱付腕木門で、そのうち旧河上家門は正徳元年(1711)に建てられ(棟板の墨書)、代々弓術指南家で禄高280石程であった。昭和53年3月町に寄贈され、練士館跡地に移築復元された(高岡町教育委員会)。その柱真は棟真と一致し、前方・後方の出桁真は3センチ程の差があるが、出桁高が前方・後方共に同じ高さであることから、肘木長さは棟

真を境に等しいとしてよいであろう(図-27参照)。次の安藤家門は鬼瓦に天保9年(1838)と記され^{註1)}、その頃の門で、わずかに後方の腕木が長い。それを屋根勾配で処理して納めている。控柱を立てない徳丸家門と比較すると軒の出と棟高が大分異なる(表-1参照)。この高岡麓においても控柱付腕木門が江戸時代から現存している。

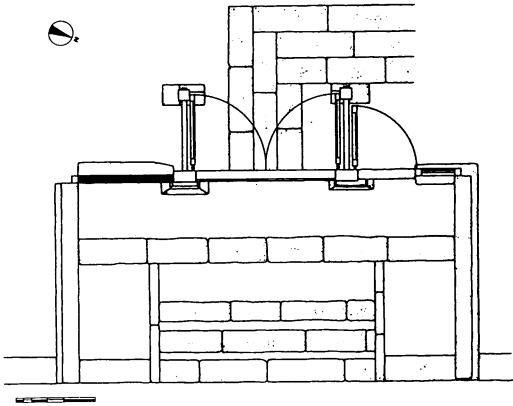


図-28 ①旧河上家門平面図

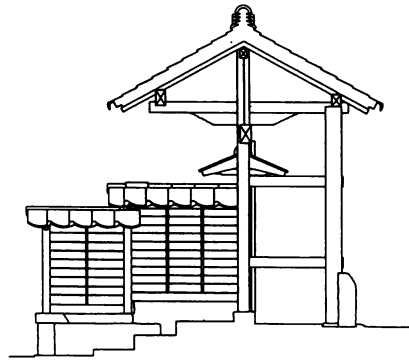


図-30 ③安藤家門断面図

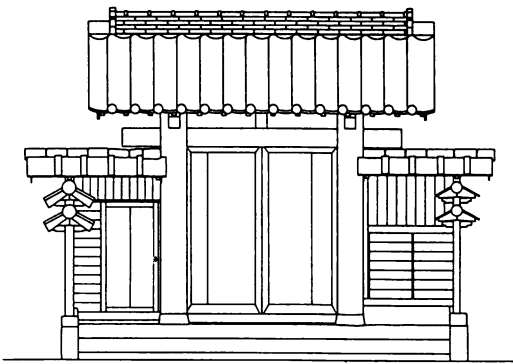


図-29 高岡家門の③安藤家門立面図

⑥蒲生籠の腕木門

蒲生籠には腕木門が多く、56棟調査した報告書がある^{註12}。そのうち代表的腕木門4棟を実測した(表-6参照)。そのうち2棟は控柱付腕木門で1棟は先に述べた仮屋門(1826年建立)、もう1棟は有村家門で文化13年(1816)頃といわれる。その門の出桁の高さが異なり、後方は腕木にのらず、柱上に置かれている(図-32参照)。棟真から出桁真まで大分差がある。志布志籠の門と類似するし、柱位置で考えれば出水籠の門とも類似する。そのため欄間状の位置に入れた本蓑服がよく見える。また棟の位置が高く姿形が美しい。他の2棟は控柱を立てず腕木が短い。現蒲生殖産興業

表-6 高岡籠・蒲生籠・大口籠の腕木門の寸法表

| 名称 | A | B | C | D | E | F | H | I | K | 年代 |
|-----------|------|----------------------|----------------------|----------------------|------|----------------------|----------------------|------|------|-----------------|
| 高岡籠 | | | | | | | | | | |
| ① 旧河上家門 | 2048 | 1019 (右) 1023 (左) | 1370 | | 3750 | 2689 (前) 2586 (後) | 1081 (前) 1112 (後) | 2100 | 1760 | 正徳元年 (1711) |
| ② 徳丸家門 | 1669 | なし | 783 (右) 779 (左) | | 2993 | 2268 (前) 2268 (後) | 585 (前) 580 (後) | なし | 1518 | |
| ③ 安藤家門 | 1966 | 987 | 1197 (右) 1262 (左) | | 3500 | 2519 (前) 2502 (後) | 919 (前) 1089 (後) | 2000 | 1680 | 天保9年 (1838) |
| 蒲生籠 | | | | | | | | | | |
| ① 有村家門 | 1890 | 1047 | 1000 | 1827 | 3600 | 2633 (前) 2483 (後) | 625 (前) 1055 (後) | 2300 | 1630 | 文化13年 (1816) |
| ② 仮屋門 | 2594 | 1359 | 1534 (右) 1483 (左) | | 4475 | 2895 (前) 2875 (後) | 1008 (前) 1311 (後) | 2700 | 2223 | 文政9年 (1826) |
| ③ 蒲生殖産興業門 | 2246 | 968 (右) 1009 (左) | 827 (右) 831 (左) | | 3660 | 2746 (前) 2748 (後) | 755 (前) 750 (後) | 2665 | 1955 | 明治初期 それ以前 |
| ④ 中条家門 | 2113 | なし | 895 (右) 863 (左) | | 2820 | 2216 (前) 2217 (後) | 320 (前) 335 (後) | なし | 1870 | 19世紀後半 |
| 大口籠 | | | | | | | | | | |
| ① 祁答院家門 | 1908 | 558 | 1077 (右) 1068 (左) | 1570 (右) 1564 (左) | 2966 | 2273 | 740 | | | 19世紀中 |

A: 親柱間真々寸法 C: 親柱・脇柱間真々寸法 E: 棟高 H: 棟高と出桁真の距離 K: 親柱間寸法
 B: 親柱・控柱間真々寸法 D: 親柱・そで壁間真々寸法 F: 出桁高 I: 小屋根の棟高



図-31 蒲生麓の①有村家門立面図

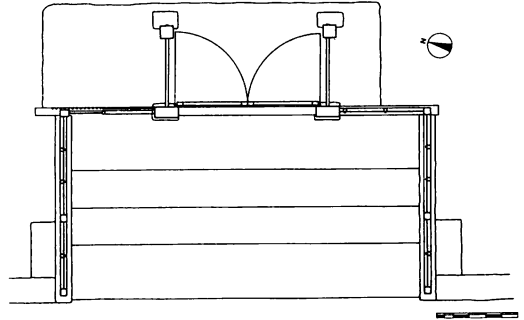


図-33 ①有村家門平面図

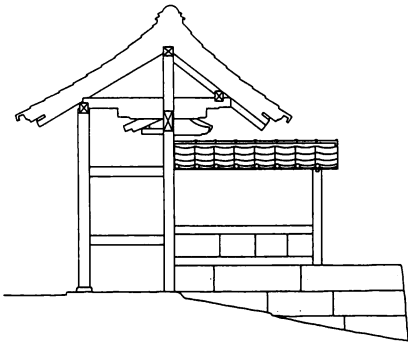


図-32 ①有村家門断面図

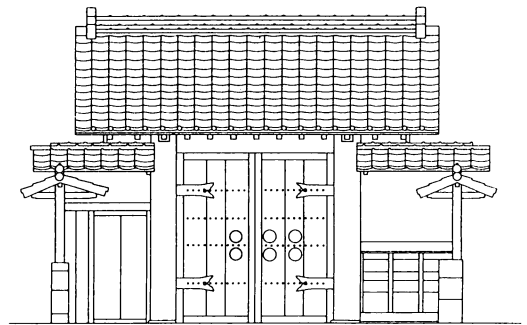


図-35 ②仮屋門立面図

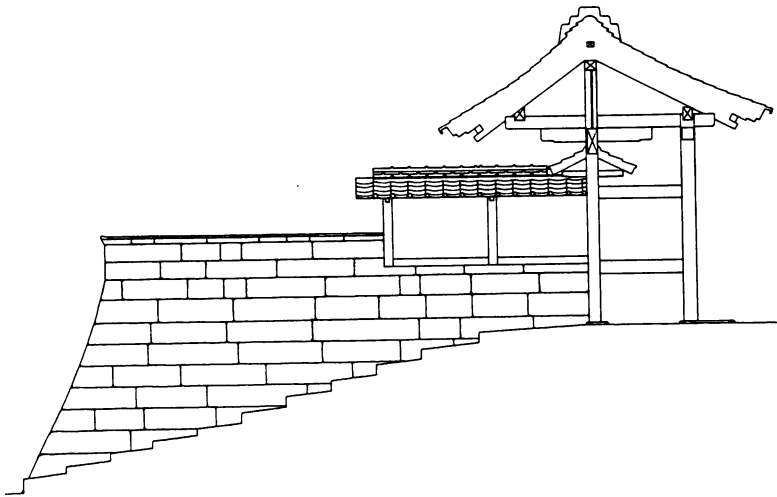


図-34 蒲生麓の②仮屋門断面図

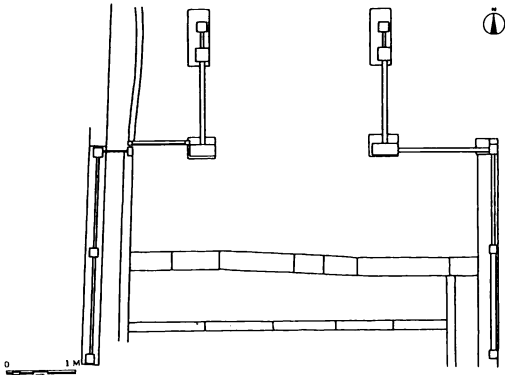


図-36 ②仮屋門平面図

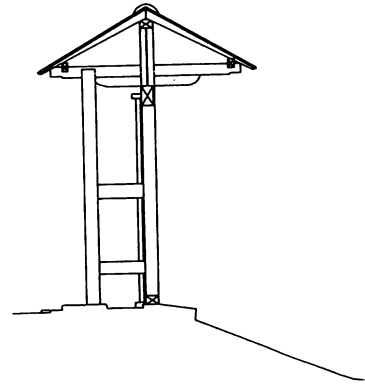


図-39 大口籠の①祁答院家門断面図

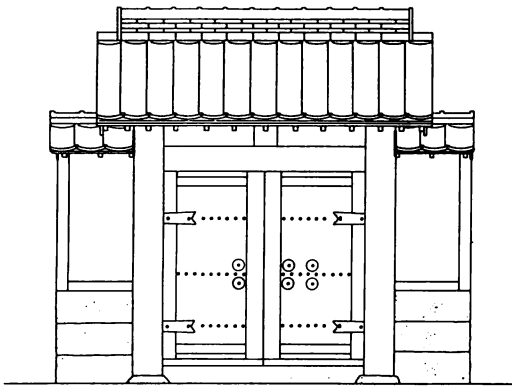


図-37 蒲生籠の③現蒲生殖産興業門立面図

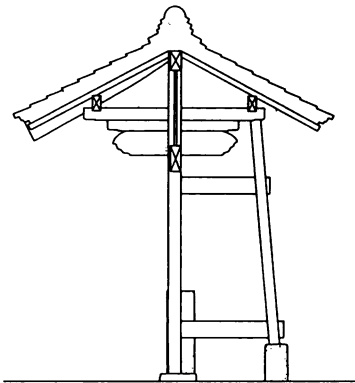


図-38 ③現蒲生殖産興業門断面図

の門は江戸期のように、このように控柱を立てない腕木門も古い時期に併存していたかもしれない。

⑦大口籠の腕木門

腕木門1棟を調査した。それは重要文化財指定の祁答院家住宅に付随した門で後に控柱を立て、当初は計

画されていない。建立時期は不明ながら、蒲生籠と同様に控柱を立てないこの種の腕木門も古くから存在していたのだろう。

以上各籠の腕木門を調べた。その結果控柱を立てない腕木門が控柱付腕木門と併存していた。このことは大切なことで、腕木門を立てることがまず重要であった。次にその腕木門の軒を深く、棟を高くしていくために控柱を立て、種々の工夫が試みられた。それが各籠の腕木門の特徴を示しているといえる。その出発に出水籠の仮屋門があり、その終点に後方の腕木を長くした蒲生籠の仮屋門が位置しているといえるだろう。

おわりに

各籠の腕木門の調査にあたって、多くの方々にお世話になった。ここに記して感謝の意を表したい。その第一は所有しておられるの方々であり、次は各市町の教育委員会文化財担当の方々である。暑い日に幾日も同行していただき感謝に堪えない。また研究室の院生・学生諸君と過去4年間に亘り、実測を共にし、共に腕木門から多くを学んだ。ここに記して感謝の意を表すしだいである。

注1：「出水籠 伝統的建造物群保存対策調査報告書」
出水市教育委員会 平成元年3月

注2：「平成元年度まちなみ景観づくり推進事業 樋脇町まちなみ保存計画業務結果報告書」平成2年3月

注3：「清色城と入来籠武家屋敷群」入来町教育委員会 平成3年3月

「水と緑の千軒まち」第4章志布志籠の構成とその歴史遺構 編集志布志町・歴史のまちづく

り委員会 平成3年3月

「旧薩摩藩入来麓一調査結果と今後の課題一」
月刊雑誌「報」日本ナショナルトラスト 1991
年10月

「志布志麓の構成とその遺構調査報告書」(志布
志町文化財調査報告書(5)) 志布志町教育委
員会 平成4年3月

注4：土田その他4名「大口麓の武家住宅の遺構（薩
摩藩の麓計画とその遺構に関する研究24）」、
「大口麓の武家住宅の遺構（薩摩藩の麓計画と
その遺構に関する研究25）」、「高岡麓の武家住
宅の遺構（薩摩藩の麓計画とその遺構に関する
研究26）」日本建築学会九州支部研究報告 第
33号 1992年3月

注5：知覧麓では小棟を有する門を本家の門と称す。

注6：蒲生麓では板扉に打つ饅頭金具の使用は100石
以上に許され、それ以下50石までは菱型金具を使
い、50石以上は小屋根を付けた。（「蒲生麓の成
立と武家門について」郷土史家 松永守道氏執

筆 蒲生の武家門 蒲生町教育委員会）。

注7：木野誠之・土田・小山田・揚村「出水麓の門の
遺構（薩摩藩の麓計画とその遺構に関する研究
4）」日本建築学会九州支部研究報告第31号
平成元年3月

注8：「宝暦十三年^{癸未} 肘岡太郎左エ門 藤原長恒
十月吉日建立之 大工石塚竜兵衛」と記す。

注9：追田耕田郎・土田・揚村「知覧麓の腕木門（薩
摩藩の麓計画とその遺構に関する研究20）」日
本建築学会九州支部研究報告 第33号 1992年
3月

注10：追田・土田・揚村「知覧麓・入来麓・志布志麓
の門の遺構（薩摩藩の麓計画とその遺構に関す
る研究15）」日本建築学会九州支部研究報告
第32号 1991年3月

注11：鬼瓦銘に「戊正月当日 天保9歳 渡邊清右エ
門源義 之作」と記されている。

注12：「蒲生の武家門」蒲生町教育委員会 昭和59年
3月